

ティツィアーノ作ヴェネツィア旧サン・ニコロ・デイ・フラーリ聖堂祭壇画
— 図像改変についての考察 —

平松 直 神戸大学

ティツィアーノ作ヴェネツィア旧サン・ニコロ・デイ・フラーリ聖堂祭壇画《栄光の聖母子と聖カタリナ、聖ニコラウス、聖ペテロ、パドヴァの聖アントニウス、聖フランチェスコ、聖セバスティアヌス》(ヴァチカン美術館)は年代を特定するような資料が乏しいことに加え、1960年代初頭に行われたカンヴァス移植の際に発見された初期の構図(Ver. I)と現在の構図(Ver. II)との間に様式的な隔たりが認められるため様々な制作年代が提言されてきた。その一方で形式の特性上、意味内容に関する議論はほとんどなされず図像改変の理由についても有力な意見はウッドとホープ(1977)の提示した1533年のボローニャ滞在で見たラファエロ《聖チェチリア》の神秘主義的側面が影響しているという説以外にはなく、不十分であると言える。

本発表では制作過程で姿を変えた聖母子ならびに聖セバスティアヌスの図像について考察することで、本作をペスト絵画であると位置づけ、図像改変の時期と1536年の疫病との関連を指摘する。

本作の聖母は、その出自において必然的に無原罪の聖母である。ゴッフェン(1986)の指摘するサンタ・マリア・グロリオザ・デイ・フラーリ聖堂のペーザロ家の祭壇画同様、本作においても無原罪性の根拠となるテキストとして数々の説教や書物に引用されたシラ書24章「高い玉座」「雲の柱」の絵画化が試みられており、とくにVer. IIでは物理的な玉座が消滅したことによって「知恵の玉座」たる聖母が強調され、Ver. I以上に無原罪性が高められている。またVer. IIの聖母子の直接的な図像源泉は先行研究が示す通り、幼児キリストの姿勢の類似や花冠の付加といった点でデューラーの《薔薇冠祝祭図》であると考えられる。その一方で、聖母の薄布をつかむという仕草はピエタとの関連が認められ、聖櫃としてのマリアの側面が描写されている。腐ることのない物質で作られたとされる聖櫃は、マリアの清廉さを表しており、この変更にはロザリオの聖母としての権能の付与、および無原罪性を強調する狙いがあったと考えられる。

反ペスト聖人である聖セバスティアヌスはローザンド(1994)の指摘する通り、Ver. Iではミケランジェロの奴隷から影響を受けた姿態で、Ver. IIでは穏やかな肉体美をたたえるアポロ的な裸体で表されている。画家は平常時には前者、ペスト時には後者の表現をとる傾向にあり、同聖人の明らかな変化という点からも、本作はペスト禍に描きなおされた可能性が高いと言えるだろう。

以上により、本作の図像改変は1536年の疫病猖獗によって促されたものであると結論付けられる。穢れなき乙女として生まれた聖母はこの変更により、多様な権能を併せ持つこととなり、ペストという恐怖の前に立たされた人々を救済する存在として、ふたたび生まれかわったと提言できるだろう。

(ひらまつ・なお)